九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

日本漢音資料としての台湾閩南語の研究

張，瓊玲
九州大学大学院（博士課程）

https://doi.org/10.15017/12011

出版情報：語文研究. 58, pp.28-45, 1984-12-25. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

日本漢音資料としての台湾閩南語の研究

張　瓊　玲

一、はじめに

現在、台湾で用いられることばには、国語としての北京官話をはじめ、台湾閩南語・客家語・広東語・高砂族言語及び少数の大陸各地の方言などがある。その中、台湾閩南語は、中国閩南地方の人々が台湾へ移住するとともに将来したものである。現在、閩南語は、福建省をはじめ、台湾・フィリピン・シンガポール・南洋のインドネシア群島などに多く用いられており、使用人口は大凡四、一〇〇萬人である。

日本漢音と厦門音（即ち、中国閩南地方の代表的方言）については、すでに大島正健氏[注1]が、

厦門音は廣く台湾に行はれ、其発音は我漢音に近くして、内地人の耳に入り易き音なり。……

啻に音の方のみならず、韻の方に於いても漢音と深き縁故を保つは厦門音なり。

と述べておられるが、本稿において筆者は、筆者の母語―台湾閩南語を内省することにより、閩南語と外国借音である日本漢音との比較対照を試みたいと思う。

その中、とくに声母の明母字と声調の二点を中心に、論じてみようと考える。

台湾閩南語は自らの内省によるが、日本漢音の資料としては、いわゆる「新漢音」、ここでは例時作法・法華懺法の文亀二年本などに見られる天台漢音を用いることにし、具体的には奥村三雄氏のご論文「漢字音の体系」[注2]の漢音の部分を利用させて頂いた。

初めに台湾閩南語における音韻体系を示しておくと、おおむね次の如くである。

〔声母〕

p（悲）・p'（披）・b（美）・m（麺）・t（知）・t'（桶）
l（来）・n（籃）・ts（蛇）・ts'（車）・s（寫）・dz（入）
k（公）・k'（気）・g（宜）・ŋ（黄）・h（海）・∅（鞋）

〔韻母〕

a（阿）・o（黒）・ɔ（窩）・e（挨）・i（衣）・ia（爹）
io（腰）・iu（優）・u（有）・ua（娃）・ue（花）・ui（憂）
ai（哀）・au（欧）・iau（妖）・uai（乖）

〔鼻音化韻母〕

ã（三）・ĩ（染）・iũ（張）など

〔鼻音韻尾〕

-m（庵）・-n（安）・-ŋ（江）

〔入声韻尾〕

-p（葉）・-t（賊）・-k（握）・-ʔ（食）

〔声調〕

陰平声―第一声（東）・陽平声―第五声（同）

上　声―第二声（党）・

陰去声―第三声（棟）・陽去声―第七声（洞）

陰入声―第四声（督）・陽入声―第八声（毒）

注：括号内は例字。

二、声母について

まず、声母について台湾閩南語と日本漢音を対照させると、〈表1〉の如くである。

この表より、次のようなことが分る。

(1)、台湾閩南語、日本漢音ともに、清・濁（中国音韻学でいうところの「清・濁」の意）の区別がない。

(2)、台湾閩南語では、有気音・無気音があるのに対し、日本漢音ではそれがない。

(3)、台湾閩南語は口蓋化（即ちj-化）が起っていない。日本漢音もそうである。

(4)、両者ともに歯頭音と正歯音に分けられない。

(5)、暁母字は、台湾閩南語ではh-で発音されるのに対し、漢音ではカ行である（宋音ではハ行で表記される）。

〈表1〉

三十六字母	台語	日漢音
音唇 幫（非）	p‘	ハ行
音唇 滂（敷）	p‘	
音唇 並（奉）	p‘・p‘	
音唇 明（微）	b・(m)	バ行
音舌 端（知）	t	タ行
音舌 透（徹）	t‘	
音舌 定（澄）	t	
音舌 泥（孃）	n・l	ダ行
音牙 見	k	カ行
音牙 溪	k‘	
音牙 群	k・k‘	
音牙 疑	g	ガ行
音歯 精（照）	ts	サ行
音歯 清（穿）	ts‘	
音歯 従（牀）	ts・ts‘・(s)	
音歯 心（審）	s・ts・(ts‘)	
音歯 邪（禪）	s・(ts)	
喉音 影	φ	ア行
喉音 暁	h	カ行
喉音 匣	h・φ・k	
喉音 喩	φ	ア・ヤ・ワ行
舌音 来	l	ラ行
歯音 日	dz	ジ・ゼ

(6)、匣母字は、h-・∅・k-であるのに対し、漢音ではカ行である（宋音ではハ行で表記される）。

声母の対照において、特に興味深いのは、明母字・日母字である。明母字は呉音・唐音がマ行であるのに対し、漢音ではバ行で表記さ

れる。それはいわゆる「非鼻音化現象」（Denasalization）によるものであるが、この現象は先学によれば、八世紀にすでに起っていたと言う。当時の長安語では、b-で発音されたか、あるいは少なくともmb-であったと言えよう。

この現象は、現在の西北地方の興県・文水で明母字がmb-で発音されることとも関連しているであろう。[注3] 又、南方では、汕頭語の明母字の一部にも同様の現象が見られる。カールグレン氏の調査では、台湾閩南語は含まれていないが、筆者の内省によれば、台湾閩南語では明母字は少数の例がm-であるほかは、多くはb-で発音される。従って、この「非鼻音化現象」は中国側における西北の数ケ所と南の汕頭・閩南・台湾・外国借音である漢音のみに見られるものと言えそうである。

〈表2〉 例時作法・法華懺法における明母字の実態

例字	呉音	漢音	唐音	宋音
蒙			ムン	ムン モン
目	モク	ボツ	モ	
彌	ミ	ビ		ミイ ミ
靡	ミ			
眉	ミ			
美	ミ	ビ		
模			モ	
未	ミ	ビ	ミ ビ	

例字	呉音	漢音	唐音	宋音
味		ビ		
無	ム	ブ	ブム	ウ
迷		ベイ	ミ	ミイ
賣		バイ		
門	モン	ボン ブン	モン	モン
民		ビン		
没		ボツ		ムツ モ
愍			ミン	ミン

例字	呉音	漢音	唐音	宋音
密	ミツ			
文	モン	ブン		
聞	モン	ブン	ブン	ウン
問	モン モム			ウン
物		ブツ		
勿		ボツ		ワツ
滿	マン マム	マン バン	モン	マン
慢		バン	モン	
萬	マン	バン		ワン
面	メン メム	メン ベン		
免		ベツ	メン	
滅	メツ	ベツ	メ	メツ
眠	メム	ベン ビン		
妙	メウ ヘウ	ベウ	ミャウ メウ	ミャウ ミャーウ
摩	マ	バ	モ	モウ
魔	マ		モ	モウ
馬	メ			

例字	呉音	漢音	唐音	宋音
碼	メ			
罵	メ			
瑪				マア
莫		バク		
忘	マウ			
妄		バウ		
亡			モウ	
望		バウ		ワン
猛	ミャウ	バイ		
盲		バウ		
命		ベイ	ミン	
名	ミャウ	ベイ	ミン	ミン
明	ミャウ	ベイ	ミン	ミン
牟		ボ		メウ メーウ
冥			ミン	ミン
母	モ			
茂	ム			

《韻鏡》における明母字は、内省によれば次の三つのグループに

分けられる。

(1)、m-のみ発音されるもの。

(2)、m-・b-両方に発音されるもの。

(3)、b-のみ発音されるもの。

〈表3〉にそれぞれのグループの実例を示す。

〈表3〉

例字	b-	m-
棉		棉花。棉被。棉仔紙。
麵		麵。麵粉。麵包。大麵。
瞞		瞞。瞞騙。
毛		毛。毛病。毛筆。毛管。毛毯。毛蟹。
茅		茅草。茅坑。
摩		摩擦。
麼		什麼。
罵		罵。罵人。相罵。罵街。
魔		魔鬼。魔術。
迷	迷(B.C.D)。迷信(B.C.D)。入迷(B.C.D)。	迷(A)。迷信(A)。入迷(A)。
某	某月。某日。某人(C.D)。	某々人(A.B)。

☆(1)　☆　(2)

例字	b-	m-
妹	小妹(C.D)。妹妹(C.D)。妹婿(C.D)。姉妹(C.D)。	小妹(A.B)。妹妹(A.B)。妹婿(A.B)。姉妹(A.B)。
門	門診(C.D)。門生(C.D)。門市部(C.D)。内門(地名)。	門。一門風水。門戸。門當戸對。門風。門口。門聯。門牌。門外漢。門診(A.B)。門生(A.B)。門市部(A.B.D)。
問	問候。問題(C.D)。問答(C.D)。慰問。問號。	問。問名。問題(A.B)。問答(A.B)。
物	物。物力。物質。物体。動物。生物。物価。文物。	物。物価。物件。物配(A.B)。
満	満。満出来。満州(地名)。満分。満門(C.D)。満面(C.D)。美満(C.D)。満足(C.D)。満意(C.D)。	満城風雨。満地。満。満出来。満腹。満分。満口。満門(A.B)。満腔。満面(A.B.D)。満堂。満員。

☆　☆　☆

	滿堂。滿期。	美滿（A.B）。滿足（A.BD）。滿意（A.BD）。滿期。	
麻	麻（シビレル）。麻木。麻醉。麻薬。麻醉師。	麻（アサ）。麻竹。麻煩。麻索。麻油。麻雀。麻糍。芝麻。	
馬	馬。馬鞍。馬車。馬戯。馬鮫。馬路。馬力。馬蹄。馬腳。馬頭魚。	馬鈴薯。馬馬虎虎。馬力。馬上（すぐに）。	
碼	起碼（C.D）。碼頭。	起碼（A.BD）。	
明	明顕。明々。明白。明星。明朗。文明。明仔再。	明年。	
名	名望。名称。名詞。名産。名誉。名義（C.D）。名言（C.D）。名手（C.D）。	名。名簿。名声。名單。第一名。名正言順。名手（A.B）。名言（A.B）。名義（A.BD）。有名。	
命	命令。命題。命案。	命。性命。命運。命苦。命簿。命案。	
梅	梅仔（C.D）。	梅花。梅仔（A.BD）。	

例字			
b—	蒙古。蒙騙。	朦々。	
朦	夢。做夢。夢見。		
夢	木。木材。木瓜。木工。木星。		
木	目。目標。目眉。目瞶。目油。目鏡。目屎。		
目	眉。目眉。月眉山。		
眉	美麗。美国。美満。美好。美金。美人。美中不足。		
美	尾。尾後。尾手。尾牙。		
尾	模型。模範。模様。		
模	無聊。無限。無花果。		
無	武功。武術。武俠。武器。		
武	米。米粉。米行。米湯。米酒。蝦米。		
米	買。買不到。買収。買賣。買不了。買主。		
買	賣。賣不了。賣掉。賣唱的。賣膏薬。		
賣	民主。国民。民警。民不聊生。民営。民族。民間。		
民	悶。悶々不楽。		
悶	文。文章。文明。文物。文言。文学。文法。文雅。文憑。		

☆ 面　面。面子。面巾。面目。面對面。面色。
☆ 滅　消滅。
☆ 萬　一萬。萬一。萬国。萬歳。一百萬。
☆ 眠　眠。冬眠。失眠。淺眠。
☆ 免　免。免不了。免費。免去。免税。
☆ 勉　勉強。
☆ 蠻　野蠻。
☆ 慢　慢。真慢。慢車。慢火。慢腳慢手。慢走。慢々用。慢性。
☆ 帽　帽子。
☆ 貿　貿易。貿易公司。
☆ 廟　廟。廟寺。廟會。
☆ 妙　妙策。巧妙。妙手同春。
☆ 苗　苗圃。苗條。苗栗（地名）。
☆ 磨　磨。磨刀。磨人。折磨。磨仔。
☆ 亡　死亡。亡命。
☆ 盲　盲唖。盲従。文盲。
☆ 皿　器皿。

☆ 孟　孟（苗字）。孟宗竹。
☆ 麥　大麥。小麥。麥仔。麥仔酒。
☆ 茂　茂。茂盛。
☆ 墨　墨水。墨守成規。墨盤。墨。
☆ 閩　閩南。
☆ 母　母親。母子。母愛。母舅。
☆ 敏　敏。敏捷。敏感。霊敏。
☆ 銘　銘謝。
☆ 牧　牧草。牧場。牧師。牧業。
☆ 挽　挽。挽面。挽留。挽救。
☆ 網　網仔。
☆ 望　望。希望。失望。
☆ 墓　墓。墓仔埔。墓碑。
☆ 瑪　瑪瑙。
☆ 摸　摸。摸底。自摸。

☆印を付したものは鼻音韻尾を持つ字。下にカッコの無いものはＡＢＣＤとも一致するもの。[注4]

この表をみると、(3)、即ちb-のみ発音されるものが優勢である。(2)、即ちm-・b-両読できるものは、いくつかの例外を除けば、殆ど口語音はm-であり、文言音はb-であると認められる。特に、假摂の「麻」・「馬」二字を除いて、一字の語彙（きわめて口語的である）は殆どm-で発音される。例えば、門・問・物・名・命などである。つまり、b-で発音されるものは、文言、または口語音であり、m-で発音されるものは殆ど口語音と言えそうである。特に、鼻音韻尾を持つ字、例えば、「名」・「命」などは有坂氏が[注5]

唐代の西北中国方言では、明母・泥母の頭音は、一般には〔mb〕〔nd〕のように発音されたが、〔m〕・〔n〕・〔ŋ〕のような鼻音で終る音節では、尾音の影響を受けて、純鼻音〔m〕〔n〕の形で発音される傾向があったらしいのである

と述べられたことが思い合わせられる。台湾閩南語では、鼻音韻尾をもつ明母字は、口語音の場合であれば、発音の自然によって純鼻音〔m〕の形で発音されるのに対し、文言音の場合は師承、つまり師により伝授された、いわゆる知識音として、今日までb-が保存されたのだと思われる。[注6]

しかし、内省によれば、閩南語には、鼻音韻尾を持つもので、b-で発音されるものもいくつかある。〈表3〉の中で、☆印を付した字は鼻音韻尾を持つ字であり、全部で31字ある。〈表3〉によれば、鼻音韻尾を持つ31字のうち、8つがm-あるいはm-・b-両読できるもの、23がb-のみ発音されるものである。第二グループ、つまりm-・b-両方に発音されるものだけに注目すると、鼻音韻尾を持つものは6つあって、第二グループ全体の半数近くを占めることになる。鼻音韻尾を持つものは語頭音がm-になりやすいのであるが、以上の結果を見ると、鼻音韻尾を持つものがすべてb-になるとは言えないのである。

日本漢音では、明母字も殆どバ行に訳するが、-ŋ韻尾をもつものについては、いろんな議論がある。例えば「明」を「ベイ」と読むなどを漢音と認めない立場もある。天台漢音のほかに、有坂氏が調査された正倉院御蔵舊鈔本蒙求の漢音をみてみよう。[注7]

(1)、正倉院御蔵舊鈔本蒙求の漢音

毛（ホウ）・米（ベイ）・鳴（メイ）・門（モン）・文（フン）
聞（フン）・苗（ヘウ）・廟（ヘウ）・妙（ヘウ）・命（メイ）
明（メイ）・母（ホ）・孟（マウ）・萌（マウ）・買（ハイ）

(2)、例時作法・法華懺法の天台漢音

迷（ベイ）・民（ビン）・門（ボン・ブン）・名（ベイ）
満（マン・バン）・猛（バイ）・盲（バウ）・命（ベイ）
明（ベイ）・美（ビ）・未（ビ）・文（ブン）・無（ブ）
萬（バ）

右の表によると、正倉院御蔵舊鈔本蒙求における鼻音韻尾をもつ字がマ行で表記されるのに対し、天台漢音の方は主としてバ行で表記されている。このことから同じ漢音と言っても、資料の相違によって、その表記も違うようである。これについては林史典氏に詳しいご論考がある。[注8]

明母字のほかに、日母字の場合も同様に非鼻音化現象が見られる。日母字の問題は、声母の中でも最も注目すべきものである。清末の章太炎は、中国上代の日母をn-と推定している。[注9] 六朝初頭までの漢訳仏典では、サンスクリットのn-は、多く日母の漢字で訳されていたが、六朝末から唐代にかけての訳経には、サンスクリットのdz-の

音訳は殆ど日母の漢字を使っているのである。

台湾閩南語における日母字は、次のような三つのグループに分けられる。

(1)、l-のみ発音されるもの

茸、蕊、閏、仍、

(2)、l-・dz-両方発音されるもの

二、汝、人、忍、輭（又n-）・讓（又n-）・任、入、兒

(3)、dz-のみ発音されるもの

戒、肉（又b-）、辱、爾、而、耳（又h-）、儒、乳、孺、刃、熱、然、饒、擾、若、攘、弱、柔、蹂、染（又n-）、認、

日本漢音では、日母字は殆ど「ジ」・「ゼ」に訳する。

以上詳しく見てきた明母・日母字における非鼻音化の反映は、台湾閩南語・日本漢音における特有なものであると言える。この現象は日本漢音では明母・日母のほかは、泥母字にも起り、ダ行で表記される。台湾閩南語では、明母・日母に限り、b-・dz-となっており、その原則に従う。ただ、泥母の字はそうならず、n-とl-で発音される。

泥母字	呉音	漢音	唐音	宋音	台湾閩南語
尼	ニ	ジ	ニ	ニイ	5 ni
耨	ノク	ノク		ノツ	7 lu

女	奴	乃	内	難	惱	那	南	念	能
	ヌ		ナイ	ナン	ナウ			ネン	ノウ
ヂョ	ト	ダイ		ダン	ダウ	ダ		デム	ノウ
ニ		ナイ	ヌイ	ナン	ノウ	ノ	ナン ナ	ニャン	ネン
ニイ		ナイ		ナン	ナウ ナーウ	ノ	ナム ナ	ネム	ヌン ネン
2 lu	～5 nɔ	2 nai	7 lai	5 lan	2 lo 又～2 nau	2 na	5 lam	7 liam	5 leŋ

以上のようにn-・l-に発音されるもののほかに、又dz-に発音されるものもいくつかある。例えば、嫩・尿・賃などである。台湾閩南語における泥母は非鼻音化していない現象については、今後なお考察が必要かと思われる。

三、韻尾について

韻母の対照は本稿では省略するが、韻尾、特に入声韻尾と鼻音韻尾については若干ふれておきたい。

三―一　入声韻尾について　まず、入声韻尾から見てみよう。古代中国語の入声韻尾 -p・-t・-k は現代の西北の諸方言では、すでに全部消失しているが、呉方言では、声門閉鎖音に変化し、閩方言・粤方言などの系統の諸方言では、まだ保存されている。これらの方言には、そのほか -ʔ もあるとされている。

ところで、台湾閩南語の入声韻尾は、例えば日本語の促音ほどには破裂音がはっきりとは聞こえない極めて弱い入破音である。その点については有坂氏[注10]が

台湾閩南語の入声の場合には、中心母音の終りで息が一度弱まると、もはや再び強まること無く、弱まったままで -p・-t・-k の閉鎖が作られるのである。

と述べておられる通りである。また、羅常培氏も、入声韻尾が截断[注11]音 (implosive) であり、本当の爆発音 (explosive) でないとされる。筆者の内省からほぼ同様の結果を得る。さらに普通 -ʔ 韻尾として記述されるもののなかには、すでに声門の閉鎖すら行われないもの（即ち∅韻尾）もあるように思う。

先に述べたように、台湾閩南語には、文言音と口語音とが併存しており、その対応には規則性がある。それは特に、韻尾の場合に顕著である。入声韻尾では、文言音は -p・-t・-k であるが、口語音であれば、-ʔ と変化するものが多い。例えば、

(1)、文言が -p 韻尾で、口語音は -ʔ 韻尾となる。

例字	文言音	口語音
合	hap	ha ʔ
葉	iap	hio ʔ
甲	kap	ka ʔ
接	tsiap	tsi ʔ

(2)、文言音が -t 韻尾で、口語音は -ʔ 韻尾となる。

八	pat	pue ʔ
月	guet	gue ʔ
歇	hiat	hio ʔ
雪	suat	se ʔ

(3)、文言音が -k 韻尾で、口語音は -ʔ 韻尾となる。

学	hak	o ʔ
肉	dziɔk	bo ʔ
白	pik	pe ʔ

以上のように、-p・-t・-k から -ʔ となる例が普通だが、文言が -k 韻尾で、口語音が -t 韻尾となる例もいくつか見られる（即ち韻尾の混同）。

台湾閩南語における入声韻尾については、陳子博氏が「声門閉鎖音化の傾向が著しいのは、三者（-p・-t・-k 入声―筆者注）のうち、特に -k と -t である。[注12]」と述べられたことがあるが、筆者の内省からその実態を整理してみると、次の〈表4〉・〈表5〉を得ることができる。

〈表4〉

−k	−t	−p	
0	1.0%	66.6% (77.0%)	−p
5.0%	73.1% (87.0%)	4.2%	−t
65.8% (86.3%)	3.7%	0	−k
23.6%	21.2%	25.0%	-ʔ
5.6%	1.0%	0	φ
0	0	4.2%	その他

〈表5〉

山 −t	臻 −t	咸 −p	深 −p	摂／台語
1.7%	0	53.1%	93.8%	−p
60.0% (83.0%)	89.6% (91.6%)	6.3%	0	−t
3.3%	4.2%	0	0	−k
35.0%	4.2%	37.5%	0	-ʔ
0	2.0%	0	0	φ
0	0	3.1%	6.2%	その他

曽 −k	梗 −k	宕 −k	江 −k	通 −k
0	0	0	0	0
23.3%	0	0	0	2.0%
63.3% (80.0%)	46.2% (82.1%)	42.4% (80.8%)	66.7% (86.6%)	94.0% (96.0%)
10.0%	43.6%	53.8%	20.0%	2.0%
3.3%	10.2%	3.8%	13.3%	2.0%
0	0	0	0	0

（注：括号の内は、読音の場合の%である）

〈表4〉によれば、-p・-t・-kの三者の間には、声門閉鎖音化の傾向について特に差異はないように思われる。あえて言えば、-k・-tよりも-pの方の率が少し高く見えるくらいである。むしろ〈表5〉に見るように、摂の分類から見て、咸摂の-p・山摂の-t・梗・宕摂の-kに、声門閉鎖音化の傾向が著しいことの方が注目される。

-p・-t・-kの中、どれが-ʔに変化しやすいなどと言うよりは、むしろ摂ごとに分類して判断する方がよいのではなかろうか。その理由は、次のようである。つまり、例えば、-tが-ʔとなる率は、余り高くないが、山摂では声門閉鎖音化するものがやはりある程度に達する。また、〈表4〉によって、-pが-ʔとなる率は三者の中で一番

高いと見られるが、-p韻尾の深摂では、声門閉鎖音に変化するものは、私見によれば一例も見当たらない。通摂・江摂でも同様の現象が見られる。

以上台湾閩南語における入声韻尾の実態を述べてきたが、一方日本新漢音における入声韻尾は、唇内入声韻尾は「ウ・ツ・ø」・舌内入声韻尾は「ツ・チ・ø」・喉内入声韻尾は「ク・ツ・キ・イ・ø」など、各々三種類以上の表記が見られる。表記上は極めて混乱しているように見受けられる。この混乱は、中国から将来される時期・あるいは方言の違いなどによるためであるのか、それとも、日本側の内部の音韻変化のためなのであろうか。(注13) 小松英雄氏(注14)によれば、日本字音において唇内入声韻尾の「ツ」で表記されるものは、中国原音とは殆ど関係なく、むしろ日本語内部の事情で、そのような表記をするようになったと説かれている。先の〈表4〉と〈表6〉を比較してみると、

〈表4〉

	−p	−t	−k
−p	66.6% (77.0%)	1.0%	0
−t	4.2%	73.1% (87.0%)	5.0%
−k	0	3.7%	65.8% (86.3%)
-ʔ	25.0%	21.2%	23.6%
ø	0	1.0%	5.6%
その他	4.2%	0	0

〈表6〉

	−p	−t	−k
−ウ	61.1%		
−ツ	22.2%	85.7%	12.5%
−ク			57.1%
−チ		11.4%	
−キ			25.0%
−イ			3.6%
ø	16.7%	2.9%	1.8%

両者の三つの入声韻尾における保存率はほぼ一致すると言えるようである。すなわち、舌内入声韻尾が一番古態を保存し、次いで唇内入声韻尾・喉内入声韻尾の順であると思われる。

三―二　鼻音韻尾　次に、鼻音韻尾について述べてみたいと思う。台湾閩南語における鼻音韻尾には-m・-n・-ŋがある。そのほか主母音が鼻音化されるものもあり、これは台湾閩南語の主要な特徴の一つとなっている。この鼻音韻尾と主母音の鼻音化の併存は、やはり文言音と口語音の違いによるものと考えられる。すなわち、鼻音韻尾を持つのは文言音であるのに対して、主母音化されるものは口語音である。

そのほか、又「孫」・「人」（臻摂の-nは-ŋとなる）など、他の韻尾と混同されるものもある。その状態を分類してみると、〈表7〉と〈表8〉となる。

〈表7〉

曾 -ŋ	梗 -ŋ	宕 -ŋ	江 -ŋ	通 -ŋ	山 -n	臻 -n	咸 -m	深 -m	中古／台語
0	0	0	0	1.1%	0	2.1%	75.0% (87.5%)	89.3% (92.9%)	-m
22.2%	3.0%	0	0	0	81.6% (93.9%)	72.9% (93.6%)	11.1%	7.1%	-n
72.2% (91.7%)	52.0% (90.8%)	78.1% (82.0%)	91.0%	95.5% (96.6%)	3.3%	4.3%	0	0	-ŋ
5.6%	43.8%	21.0%	9.0%	2.3%	14.4%	0	12.5%	3.6%	~φ
0	1.2%	0.9%	0	1.1%	0.7%	0.7%	1.4%	0	φ

〈表8〉

-ŋ	-n	-m	中古／台語
0.3%	0.7%	79.0% (89.0%)	-m
3.2%	85.4% (93.8%)	10.0%	-n
74.8% (89.6%)	3.6%	0	-ŋ
20.8%	9.6%	10.0%	~φ
0.9%	0.7%	1.0%	φ

以上によって、全般に鼻音韻尾の方は（-ŋは除いて考える方がよさそうである）、入声韻尾より古く古態を残すと言ってよさそうである。又、-ŋ韻尾をもつ宕摂・梗摂所属字が無韻尾される率は、ほかの摂より高いことが明らかになる。

宕摂では、文言の韻母は大約-ɔŋ・-iɔŋであるが、口語音の場合：

-iɔŋ　-ɔŋ

↓　↓

-iũ　-iɔŋ　-ɔŋ

のようである。-iɔŋが-iũへ変化した代表的な字は、殆ど《韻鏡》の歯音・舌歯音・喉音の三等・四等におけるものである。宕摂にあるものの韻尾の消失は、-iɔŋ→-iũという方向の変化のみが見られること

になる。

次に梗摂において鼻音化するものは、半分は-ĩとなり、残りの半分は-iãとなる。又、-ĩとなるものは、多く二等・四等に属しているのに対して、-iãとなるものは多く三等字である（例外があるが、非常に少い）。以上を図で示せば、次の通りである。

声母の面から見れば、唇音・牙音において若干の用例が見られるが、無韻尾化するものの多いのは、歯音と喉音のものであると言える。

以上によって、主母音の鼻音化は声母の発音の部位（調音点）と介音の有無とに関係がありそうに思われる。宕摂・梗摂のほかに、山摂の-nは、鼻音韻尾が弱化して、主母音が鼻音化されるのも、注目すべきであると思われる。整理すると、次のような図を得ることができる。

臻摂は、山摂と同じに-n韻尾である。しかし、無韻尾化（或いは主母音鼻音化）は山摂の場合のようには起こっておらず、むしろ一例も見られない。このような大きな差が存在する理由は、山摂は-an・-ianが多くあるのに対し、臻摂は-in・-unを主とする点、すなわち/a/の有無の差であると思われる。おおまかに言って、-an、-uan、-ianのように、-n韻尾の直前に/a/があるものは、-n韻尾が消失して、母音が鼻音化されることが多いようである。

鼻音韻尾は、無韻尾化するほかに、他の韻尾と混同する場合もある。例えば、

(a)、-ŋが-nとなるもの、
(b)、-nが-ŋとなるもの、
(c)、-mが-nとなるもの、

この三者の中、特に(c)が注目に値すると思われる。《中原音韻》において、声母が唇音であるものであれば、韻尾-mは-nとなることは周知の事実である。[注15] (c)に分類される品・禀・凡・范などは、すべて《韻鏡》の唇音に属する。台湾閩南語における深摂・咸摂に属する唇音字も殆ど-n韻尾に同化される。すなわち台湾閩南語もこの規則に従っていることが明らかである。

そのほか通摂・江摂においては、入声音韻尾と鼻音韻尾は余り変化していない。両摂の韻尾は、きわめて安定していると言えるであろう。回鶻文寫本菩薩大唐三蔵法師伝において、漢語固有名詞を次のようにウイグル文字で表記しており、[注16]

長安 cooan、大唐 taito、光 qoo、蔵 tso（宕摂の-ŋは、消える）

令 li、経 ki、英 i（梗摂の-ŋは消える）

公・宮 kung、粽 tsung、鍾 cung（通摂の-ŋはだいだい残る）

-ŋが消滅する傾向が強いが、通摂の-ŋはそうではない。それも通摂が変化しにくいということの一つのあらわれであろう。

さて、日本漢音における鼻音韻尾の実態は、次のようである。

韻尾	-m		-n		-ŋ				
摂	深	咸	臻	山	通	江	宕	梗	曾
呉音	ム・ン	ム・ン	ン（ン・ム並行）	ン（ン・ム並行）	ウ・φ	ウ	ウ	ウ	ウ
新漢音	ム	ム・ン	ン	ン	ウ・φ		ウ	イウ	ウ・φ
中世唐音	ン	ン・（ム）	ン	ン	ウン・φ		ウ	ン	ン
近世唐音	ム・（ン）	ム・（ン）	ン	ン	ン	ン	ン	ン	ン

この表によれば、新漢音と中世唐音とは複雑な様相を示している。

特に、喉内韻尾は問題であるが、これについては、有坂氏[注17]や奥村氏[注18]のご論文に詳しいので、ここでは特に触れない。両氏の御説を参照されたい。

四、声調について

中国の音節には、固有の高さアクセントが伴っている。声調の変化が、声母ときわめて密切な関係があることは既知の事実である。声母の清・濁を基準として、陰類・陽類を分けることができるが、歴史的に見れば、何時頃からその現象が始まるのか、現在の段階では、明らかではない。台湾閩南語では、陰平・陽平・上・陰去・陽去・陰入・陽入など、七声がある。その実態を整理すれば、大略次の表を得ることができる。

〈表 9〉

韻鏡	平		上			
	清	次清	清	次清	濁	清濁
台湾閩南語	陰平声（第一声）		陰上声（第二声）		陽去声（第七声）	陰上声（第二声）
例字	風・江・雞・因・歡	豊・腔・呑・初・翻	講・紙・死・許・虎	桶・草・可・請・肯	動・跪・視・近・抱	美・引・軟・永・雅
	陽平声（第五声）					
	同・松・匙・葵・懐	蒙・尼・埋・疑・雲				

去声			入声		
清	次清	濁	清	次清	濁
陰去声（第三声）		陽去声（第七声）	陰入声（第四声）		陽入声（第八声）
凍・寄・秘・四・放	痛・翠・圃・片・寸	鳳・巷・地・字・助	福・竹・叔・筆・骨	哭・七・客・測・尺	毒・局・學・術・舌
		夢・二・胃・裕・麗			育・六・物・烈・薬

この表の中で、特に注目したいのは、陽上声が、濁と清濁によって分けられ、全濁は陽去声と合併し、清濁は陰上声と合併する傾向が著しいという点である。これは〝濁変去声〟説と一致する。(注19)

漢音の声調体系については、悉曇蔵をはじめ古来の古記録にしばしば論じられるが、実際の漢音資料によれば、六声体系を主流とすることは先学の究明されたところである。その中、〝上声全濁字〟に関しては、さまざまな議論がなされている。(注20) 沼本氏は、26資料を、広韻の上声全濁字と対照して調査された。さらに日本漢音の上声全濁字の去声化の比率の多寡を中国側の去声の歴史的変化に照らして、

(1)、日本漢音の中、上声全濁字が殆ど本の上声を保っているもの

―（略）―は、最も古く我国に将来された漢音。

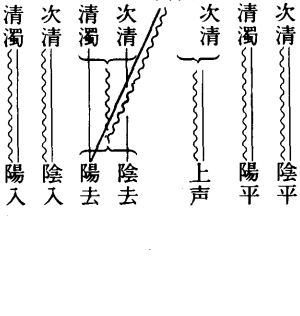
(2)、上声全濁字に於いて本の上声を保つ比率と去声へ移行した比率の約そ半々のもの―（略）―は、次に古く我国に将来された漢音。

(3)、上声全濁字が殆ど去声へ移行したもの―（略）―は、最も新しく我国に将来された漢音。

との推論を得ておられる。(注21) すなわち、沼本氏は漢音が移入された時間の前後・資料の違いなどによって、日本漢音は古層、中層、新層から成立するとされるが、筆者は現時点では、この沼本氏の立場に従いたいと考える。

以上によって、声調体系については、台湾閩南語では七声調であるのに対し、日本漢音では六声調であるが、両者は上声の全濁字が去声化する傾向が強いという点で共通していることが分る。

又、上述沼本氏の説によると、台湾閩南語の声調体系は旧漢音より新層漢音のほうに類似していることになる。両者と中古音の体系とを比較してみると、次のようになろう。



五、おわりに

いわゆる「非鼻音化」の現象は、唐代長安語に特徴的な現象があって、日本漢音が、それを反映していることはすでに周知のことである。これに対して、台湾閩南語の場合は、同じように唐代長安語と関係があるのか、あるいは、独立にこの現象が起こってきたのかは、又別に考えなければならない問題である。

筆者はおそらく唐代長安語は台湾閩南語と日本漢音の〝祖語〟であり、同期に両地方に伝えられたものと考える。中国のほかの地方では見られないこの現象が、台湾閩南語と日本漢音に見られる点をもって、両者に何らかの関係があるとすれば、もちろんたての関係ではなく、横のつながり、いわば〝兄弟関係〟ということになろう。

台湾閩南語が唐末長安語の特徴のいくつかを保存しているその理由としては、いくつか解釈の可能性があるが、まず、第一に民族移動の影響ということが考えられる。

歴史資料によると、安禄山や黄巣の乱のために、中原の民族がその乱をさけて、福建まで大移動してきたことが分る。[注22] 隋・唐・宋代における福建地方の人口は、史書によれば、次の通りである。

隋大業二年（AD六〇六）　一二、四二〇戸
　―『隋書』・「地理志」
唐天宝元年（AD七四二）　九〇、七〇六戸
　―『旧唐書』・「志理志」
宋元豊初年（AD一〇七八）　一、〇四四、二二六戸
　―『元豊九域志』

唐から三〇〇年間に、十一倍にも増加したことが推察されるが、この人口の大移動に伴って、当然ことばも伝来したと思われる。それゆえ、台湾閩南語は唐末の長安語のいくつかの特徴を保存しており、日本漢音と相似する点があるのだと考えられる。

また、二つ目の解釈として、方言周圏論的解釈の可能性がある。つまり、唐の時代に文化の中心地であった長安から、唐の文化やことば等が南方地方まで伝えられた。時代の降るに従って、文化の中心地の長安から、だんだん新しいことばが生まれ、それに対し、古いことばが辺境部分に残存する。明母・日母字の非鼻音化現象は、北京などを含む広い地域では消失したが、遠い南方にある福建・台湾・汕頭と西北にある興県・文水など、すなわち、周辺部に残存したものと考えることもできる。

今のところ、一番目つまり民族大移動の蓋然性が高いと考えている。今後なおよく検討してみたいと思う。

〔付記〕
本稿を成すに当っては、奥村三雄先生・陳伯陶先生の御指導を仰ぐ、記して感謝申し上げる次第である。
なお本稿の内容の一部は、昭和五十九年度九州大学国語国文学会において口頭発表したものに加筆訂正したものである。

注1：『漢音呉音の研究』　第一書房　（S6・10）
注2：「日本漢字音の体系」　訓点語と訓点資料第六輯　（S31・4）
注3：カールグレン氏の『中国音韻学研究』の「方言字彙」による。
注4：この表では筆者の内省のほかに、三人のインフォマントによるデータを加えた。
A黄志偉（男）29才　学生。台南県佳里鎮生まれ。（佳里鎮―位置：台南市駅から北へ約20㎞・交通：台南市駅からバスで30分・人口：五萬人。工場が多い）0～18才（佳里鎮）18～23才（台北で勉強）23～25才（高雄で兵役）25才から半年佳里鎮・25.5～29才（日本・福岡市）日常生活では、主として台湾語を使っている。標準語より台湾閩南語の方がより自由に話せる。方言保有度がきわめて高く、

話も好きである。

B徐莉萍（女）25才学生・台南市生まれ。（台南市―位置：台湾の南部にあり、台北市から350km・交通：台北市から高速道路で四時間・面積：一七五、七平方キロメートル、人口：六十萬人、商業・文化の都市である）

0～20才（台南市）20～25才（日本・福岡市）

日常用語は台湾語を主とする。0才から20才までずっと台南市にいる。両親とも台南の方が、方言の保有度も高い。

C彭春陽（男）24才学生、宜蘭市うまれ、（宜蘭市―位置：台湾の東北にある。交通：汽車で二時間半、公路バスで三時間、人口：四十萬人）

0～10才（宜蘭市）10～23才（台北市）23～24才（日本・福岡市）

父：安徽省生まれ（60才）・父との対話は北京官話による。

母：宜蘭市にうまれ、宜蘭市に育つ（50才）・母との対話は台湾閩南語による。

北京官話と台湾閩南語、両方とも自由に使える。

D張瓊玲（筆者）25才、基隆生まれ、0～14才（基隆）13～22（台北）

筆者の台湾語は主として両親から覚えた。家では両親・親戚と台湾閩南語で話す。外に出ると、北京官話で交談する。両親は台中県出身、父は25才・（母は21才）から、仕事のために北上する。

注5：「メイ（明）ネイ（寧）の類は果して漢音ならざるか」（『国語音韻史の研究』所収）

注6：周知のように、口語音と文言音が顕著に分けられるのは閩南語の一大特徴である。王育徳氏は、「八世紀末から九世紀の福建地方では、長安から赴任してきた大官が、学校を開設して詩文を習わせる、その場合長安の標準音の学習使用が当然強制された、このことが制度化し、広域にわたり相当期間持続されたら、文言音の体系の成立ということにつながるであろう」と論じておられる（「福建の開発と福建語の成立」日本中国学会報21号　一九六九）

注7：「正倉院御蔵舊鈔本蒙求の漢音」（『国語音韻史の研究』所収）

注8：「日本字音における明母・泥母等の子音について――法華経読誦音の成立と伝承に関する問題をめぐって――」（『馬淵和夫博士退官記念国語論集』所収）

大修館書店　（S56・7）

注9：「古音娘日二組帰泥説」『国故論衡』

注10：「入声韻尾消失の過程」（『国語音韻史の研究』所収）

注11：『厦門音系』一六ページ　古亭書局

注12：陳子博「台湾閩南語の研究」（「語文研究」48　S54・12）　ここに示された入声韻尾に関する結果と筆者の見解とはやや差異がある。この差異は、考察にとりあげた語例に若干の異同があることも関係するが、内省による認定に異なるものがあるからである。

注13：林史典　『日本語の世界4』第五章日本の漢字音　中央公論社

注14：「日本字音における唇内入声韻尾の促音化と舌内入声音への合流過程」　国語学25（S31・7）

注15：王力　『漢語史稿・上冊』　一三五ページ　（一九五八・8）

注16：馮家昇　「回鶻文寫本菩薩大唐三蔵法師伝研究報告」　中国科学院考古学専刊丙一号

注17：「諷経の唐音に反映した鎌倉時代の音韻状態」（『国語音韻史の研究』所収）

注18：「喉内韻尾の国語化」　国語・国文第十九巻第三号　（S25）

注19：前掲（注15）に同じ。

注20：これについての論文は、

①奥村氏の「いわゆる漢音呉音の声調について」　国語国文第31巻（S37・1）

②頼惟勤氏の「漢音の声明とその声調」　言語研究17・18合併号　（S26・3）

③柏谷嘉弘氏の「図書寮本文鏡秘府論の字音声点」　国語学第61輯（S40）

などがある。奥村氏は、切韻のままほぼ上声を保つとされるのに対し、頼氏・柏谷氏は去声へ移行していたとされるのである。

注21：「唐末上声全濁字の去声化を通じて見た日本漢音の体系について」　国語と国文学50　（S48・2）

注22：「黄巣乱後…（中略）景福二年（八九三）朝廷は王潮を福建観察使としたが、後王潮が死存に及んで、其の弟審知が潮の事を代行し、梁の開平三年（九〇九）遂に命ぜられて閩王となった。」

又、崇正同人系譜に、

「而南来之祖、則チ潮ニ始シ於唐之末年ニ、有リ宋室ノ李孟（トイフモノ）、因レ避（リナ）ークルニ黄巣之乱ニ、由リ長安ニ遷ニ於汴梁ニ、繼（イナ）ー遷ル福建寧化石壁鄉ニ。……」　以上、羅香林の『客家研究導論（上・下冊）』による。このほか、

北山康夫　「唐宋時代に於ける福建省の開発に関する一考察」史林第24巻第3号

日比野丈夫　「唐宋時代に於ける福建の開発」東洋史研究第四巻第3号（S14）

王育徳　「福建の開発と福建語の成立」日本中国学会報21号

などを参照したい。

〔補注〕

本論で、日本漢字音と同様台湾閩南語でも[m]・[b]の区別ができると述べたが、さらに詳しく見れば、

	木	白
呉音	モク（[m]）	ハク（[p]）
漢音	ボク（[b]）	ビャク（[b]）

のように、日本語の場合、[m]・[b]のほかに、[p]・[b]も区別される（二つの音が対立し、意味の区別がある）。しかし、閩南語では有声音と無声音の区別があまり明確でない。従って、閩南語を母語とする人々が日本語を学習する場合では対立するはずの[p]・[b]の音の違いを無視する傾向があり、しばしば両者を混同して発音するようである（北京官話や広東語を話す人々の場合も同様）。

このほか、[t]と[d]・[d]と[n]・[d]と[l]などの交替もよく見られる（例えば、「未ダ」を「マタ」・「男性」を「ナンセイ」あるいは「ランセイ」・「子供」を「コロモ」と言う等）。北京官話を母語とする人々場合は[m]・[b]も混同しやすい（例えば、「勉強」を「メンキョウ」と言う等）。従って、中国人は、日本語を発音する時、特に、これらの点に注意しなければならないと思う。これに関する参考文献として以下のものなどが挙げられる。

服部四郎　『音声学』
寺川喜四郎　『大東亜諸言語と日本語』
文化庁　『音声と音声教育』
野沢素子　「台湾人留学生の日本語学習に於ける音声の諸問題についての報告」『日本語と日本語教育　3』